

身近な地域の調査

— 実際に観て歩くことでわかる地域の魅力 —

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫



その一 身近な地域の調査をする意義

まずは改めて学習指導要領から身近な地域の学習の意義を考えてみましょう。大きく二つが考えられます。

①地理的見方・考え方の深化と社会参画

身近な地域の調査は、学区域など生徒の日常生活で見たり聞いたりできる範囲の事象を対象としており、野外での観察や調査が重要な役割をもっています。世界の諸地域や日本の諸地域の学習で習得した知識、概念、見方・考え方が身近な地域で観られる事象で生かされ、納得できる真の理解へとつながるのです。さらに学習指導要領では、地理的分野において社会参画の視点で学習を進めるべき最も重要な部分となっています。ここで社会参画の視点をもたせるためには、地域の課題を見いだす活動が重要です。そのためにも実際に地域を歩いて自分の目で課題を見いだす視点や方法がポイントです。

②市町村規模の地域の調査の視点や方法

国や都道府県規模の調査では、写真や地図、統計資料や文章資料などによって間接的に地理的事象や地域的特色を見いだすことが基本です。それに対して市町村規模の調査では、自分の目や耳で観察・聴取、体感・体験したことを、地図や写真、統計資料などで確認したり補足したりして調べる活動で、フィールドワークが主体の活動といえます。直接観察・調査して体感・体験したことをもとに地

域の課題を見いだすことが大きなねらいです。さらに観察や調査の結果を地図を有効に活用して事象を説明したり、調べたことを地図化したりしてまとめる工夫が必要です。また、地域の課題と関連づけてまとめ発表する際には、自分の解釈を加えて論述したり意見交換したりすることが求められています。

以上のように、身近な地域の調査には、直接経験によって地理的見方・考え方や学び方の基本を身につける意義があります。また、自然体験や社会体験などの原体験が減少している昨今だからこそ、地域の「もの」や「人々」との出会いを通して社会認識を深め、コミュニケーション能力を養うことも有意義なことと考えます。



ポイント①

直接観察・調査することが見方・考え方、学び方を深める（為すことにより学ぶ）

その二 地図に慣れ親しむ

— 地形図の学習が基本 —

学習指導要領解説p.64には、地理的技術の一つである地図の活用に関する技術として、「地形図や市街図、道路地図、案内書の地図などに慣れ親しみ、どこをどのように行けばよいか、見知らぬ地域を地図を頼りにして訪ね歩く技能を身に付けること」（下線は筆者）と示されています。最近では目的地までのルートや時間をWebで検索をしてその案内

に従って行動をすることに慣れています。しかしこれでは地理的スキルがいっこうにみがかれず、いざというときに生き抜く力が身につきません。やはり義務教育段階において、地図に関するスキルをきちんと身につける必要があると考えます。

5万分の1や2万5千分の1を基本とする地形図の学習を地理的分野の指導計画の中にきちんと位置づけてほしいと思います。地形図の学習は、三角州や扇状地など日本の国土学習や日本の諸地域の学習において産業の変化や都市化など歴史的変容を扱う際に重要なことです。そこで地形図の学習は、日本の国土学習と関連づけて指導計画に位置づけることも一つの方法です。



ポイント②

地形図の学習は、日本の国土学習の中に位置づけることが効果的

その三 身近な地域の調査の学習と日本の諸地域の学習の関連

前述したように、身近な地域の学習は世界の諸地域や日本の諸地域の学習で習得した知識、概念、見方・考え方が生かされる場です。とくに日本の諸地域の学習で学んだ見方・考え方で身近な地域を見直し、目の前に観られる事象をより広く深く追究することが身近な地域の学習の重要な意義です。

それから考えると、日本の諸地域の学習において身近な地域が属する地方の学習、つまり自分が住んでいる地方の学習を地方誌の学習の最後に位置づけ、身近な地域の調査の学習につなげ関連づけることが最も有効な指導計画であると考えます。

ここでは東京都内の中学校を例に考えます。関東地方では「人口や都市」を中核的考察の視点で、人口の増大と都市化・大都市圏の拡

大について学びます。東京都内の多くの中学生にとっては目の前に見える事象です。人口増大と都市化の背景と変遷について、市区町村規模での統計資料や地図、写真、文章資料、史料で調べ、実際の地域を野外調査することによって関東地方の一部である身近な地域の特色及び課題を明確につかむことができます。そのことからさらに「人口や都市」の視点以外の事象にも関心を見だし調べようとする生徒が出てくると思います。

前述したように身近な地域の調査の学習においては、地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養う学習が求められています。地方誌の学習の事例として身近な地域の事象を取り上げて、具体的に調べ学習を先取りする工夫もあります。いずれにしても身近な地域が属する地方誌の学習を身近な地域の調査の学習につなげる内容や方法、指導計画上の工夫が必要です。



ポイント③

身近な地域が属する地方の学習を地方誌学習の最後に位置づけ、身近な地域の調査の学習につなげる

その四 学校周辺・学区の野外観察・調査—実態に応じた工夫を—

中学校社会科の教育課程実施状況調査や学校現場の先生方からの声で最も課題としてあげられることは、身近な地域の調査をやる時間がない、安全上の配慮から野外調査(フィールドワーク)が実施できないことです。実際、地形図の学習はできても野外調査の時間は取れない、1人の教員では30人以上の生徒を引率して野外調査をすることが地域的に困難なケースがあることは推測されます。しかし、だからといってまったく野外調査をしないこ

とは本単元の学習の意義から考えて好ましいことではありません。そこで、授業時間内のできる学校周辺の野外観察、あるいは夏休み等の課題として個人やグループで観察できる学区域の野外調査をやることをおすすめします。その際、例えば1学期号のトラの巻⑦の最後に示した以下のような観察の視点を提示することが必要です。

- ① 学校の正門から市役所までおよそ何kmか？ 正門から市役所への方位は？
- ② 学校の位置する台地と下の田んぼとの高低差は何mか？
- ③ 学校周辺の農家でおもに栽培している作物は？ おもにどこに出荷されているか？
- ④ 学校周辺の住宅地はいつごろ形成されたか？ 住宅地以前の土地利用は？
- ⑤ 学校前の〇〇街道はいつごろつくられたのか？ 街道はどこどこを結ぶ道か？
- ⑥ 〇〇市のこれまでの人口の推移は？

上記の視点は、地形図上での計測や新旧の地形図の比較によっても調べられる内容です。しかし、地形図上で学習したことあるいは予想をしたことと実際に地域を歩いて観察したことを照合し確認することも大切です。距離や方位を体感すること、実際の事象を目で確かめることが野外調査の意義として大切なことです。

生徒に観察させる地点や視点は、授業者が実際に歩いてみて授業者自身が疑問や課題を体感することで見いだすことができます。そのことが生徒の問題意識につながります。

以上の観察の地点と視点を指定して野外調査をすることの他に、比較的容易に調べられる調査項目を指定して調べさせ、その後の本格的な調査課題（テーマ）の決定に結びつける工夫も考えられます。例えば、比較的人口が集中している市街地では、

- 郵便ポストの位置と数
- 町内会のごみ収集場所の位置と数
- コンビニエンスストアの位置と数

これらの施設の位置と数を地図上に落として分布図を作成することにより、日常生活とのかかわりからなぜその位置にあるのかなど、規則性や共通性を見いだすことが地理の見方・考え方を育成することにつながり、さらに地域の特色と課題を見いだすことにつながります。

実際に歩いて行う野外観察・調査において身につけさせたい感覚があります。一つは、方位です。今自分はどの方位に向いて歩いているのか、立ち止まったとき今どの方位を向いているのか、体感として16方位を身につけてほしいのです。これは防災教育の観点からも大切なことと考えます。二つ目は、距離感と広さ、高さの感覚です。自宅から学校まで何百mか、学校を中心として半径1kmほどまでの範囲か、学校の敷地の面積は何千㎡か。この感覚は日本の諸地域の産業にかかわり、学習の中でも農地や工場の面積等を実感させることに必要な感覚です。一方坂上と坂下の高低差を観るときには、坂下にあるビルの階数を利用して判断することができます。例えば、坂上から観て坂下のビルの3階の上ならば3×3mで約9mの高低差と判断できます。野外で予想したこれらの距離・広さ・高低差の実際の数値を地形図で確認することが大切です。

以上のように、学校周辺・学区域を実際に歩いてみないとできない観察・調査の工夫があります。



ポイント④

まず教師自身が歩いてみて、学校周辺でできること・すべきことを考え、実行すること

その五 まとめと発表の工夫 — 社会参画につなげる工夫を—

身近な地域の調査で調べた内容はレポートにまとめたり、模造紙にまとめて掲示したり

することが一般的です。それだけではなく、これからは自分の考えを發表し、他者と意見交換し考えを深める活動が求められています。班の課題に対して班としての考えをまとめ、学級内で発表し合い意見交流することにより、より広い見方・深い考え方に接し、より高い達成感が得られます。

さらに社会参画の視点から地域の課題を見だし、その解決に向けた内容の場合は、総合的な学習の時間とリンクさせて、保護者や地域の方々にも聴いていただく場や、公民的分野の学習の導入として、調査の中でかかわった市区町村の行政機関の方々に中学生の意見を聴いていただく場を設定し、地域への社会参画を実感させる工夫も大切です。

実際東京都では、中学生が通学路の交通状況を調べて発表した意見が行政に取り入れられ、カーブミラーやガードレールが設置された事例があります。



ポイント⑤

調べたことのアウトプットにおいて地域や人へのつながりを意識させること

それでは、東京都の中学生が実際に行った

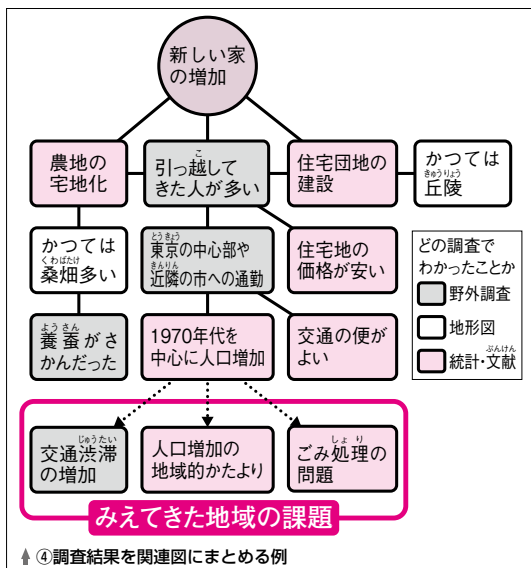


図 地域の課題をとらえる例 (東京都八王子市の調査の場合) 『社会科 中学生の地理』 p.273

身近な地域の調査の事例をみてみましょう。

【身近な地域の調査の事例】

〈東京都 葛飾区立立石中学校〉

○テーマ「みんなに優しい街づくり～立石・葛飾区の未来を考える～」

- ・誰がいつ行ったか
女子バレーボール部→放課後や土日を活用した
- ・何を調査したか
立石駅北口再開発と区役所建て替えに伴う問題
- ・どのように調査したか
 - ・現在の区役所庁舎の問題と建て替えについてアンケート調査
 - ・区役所での聞き取り調査
 - ・区役所建て替えと京成線立体化、立石駅前再開発に伴う影響調査
 - ・立石駅北口の現地調査
 - ・立石駅北口再開発についてのアンケート調査
 - ・再開発の先進地域「曳舟駅」を現地調査
 - ・再開発のメリット・デメリット
 - ・調査結果から私たちが残したい「立石らしさ」について、提案

- ↓
- ・「立石らしさ」があふれた街づくり
 - ・安くて美味しい飲食店が多い
 - ・おじさん、おばさんでにぎわう商店街
 - ・人々の心がつながる下町の人情



左：アンケート調査に出発するようす。 右：区役所での聞き取り調査。

上記の事例は、自分たちが住む街の問題を、行政の立場、住民の立場の両面からじかに接して調べまとめ、中学生の目線で街のよさを見だし、街づくりを提案したものです。街を愛する優しさと社会参画の意識の高さを示したすぐれた発表です。この事例は、中学生の身近な地域の調査の実践事例の発表会「F.I.J. (フィールドワーク in Japan)」で、2015年の優秀作品に選定されました。

【F.I.J. (フィールドワーク in Japan)】の紹介

全国中学校地理教育研究会が主催する中学生の身近な地域の調査の実践事例の発表会です。総合的な学習の時間として、あるいはグループで夏休みや放課後等を活用してフィールドワークした結果をまとめ、発表しています。詳しくはHPをご覧ください。(全国中学校地理教育研究会で検索)